

「正信偈」について（第十三回）

正信偈の教え中 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

せんぜだいじょうむじょうほう

宣説大乘無上法

大乘無上の法を宣説し、

しょうかんぎじしょうあんらく

証歡喜地生安樂

歡喜地を証して、安樂に生ぜんと。

けんじなんぎようろくろく

顯示難行陸路苦

難行の陸路、苦しきことを顯示し

しんぎよういぎようしいどうらく

信樂易行水道樂

易行の水道、樂しきことを信樂せ

おくねんみ だ ぶほんがん

憶念弥陀仏本願

弥陀仏の本願を憶念すれば、

じねんそくじにゆうひつじょう

自然即時入必定

自然に即の時、必定に入る。

ゆいのうじょうしょうによらいごう

唯能常称如来号

ただ能く常よに如来の号みなを称して、

おうほうだいひ ぐぜいおん

応報大悲弘誓恩

大悲弘誓の恩を報ずべし、といえ

り。

〔意訳〕

大乘この上ない法を述べ伝え、歡喜地という悟りを得て、安樂淨土に往生するであろう、と。龍樹大士は、進むのに困難な陸路は、苦しいことを顯かにし、行くのに易しい水路が、楽しいことを信じて願わせてくださった。阿弥陀仏の本願のことを思い続けるならば、おのずと即時に往生が確定する位に入るのである。ただただ常に如来の名号を称となえて、大悲の誓願のご恩に報いなければならない、と教えられた。

「大乘」というのは「大きな乗り物」それは「多くの人を誰でも、迷いの状態から、迷いのなくなつた状態に導いていける教え」と理解できます。全ての人が迷いから覚めて、真実に沿って安楽に生涯を尽くしてほしいと願われた釈尊のお心と、自分一人の解脱を求める伝統仏教の受け止め方の間には大きな隔たりがあります。「歡喜地」というのは、菩薩が到達される覚りの境地のことで、何が真実であるかという事が明確に体得され、間違いなく仏に成れるという確信が得られるという境地の事です。

龍樹大士は、「難行の陸路」自分の努力によつて覚りを得るために、それこそ命がけの修行に励まれたことでしょう。目の前にちらつく世間の快樂と闘い、ややもすれば氣力を失いがちな自分の心を奮い立たせながら、ひたすら道をきわめようとされたでしょう。しかし、励まれれば励まれるほど、自分の力の限界、自分の弱さ、自力を尽くすことの空虚さ、それを痛切に思い知らされるようになられたのではないか。その時に、ハッと気づかれたのが、「易行の水道」阿弥陀仏の大慈大悲によつてはたらきかけてもらっている本願他力の教えのありがたさだったのでしょう。

この私をたすけてやりたいと願つておられる阿弥陀仏の本願のことを、いつも心にとどめているならばそれがそのまま、私には説明できないけれども、私は間違いなく阿弥陀仏の浄土に往生させてもらえることになっていると、教えておられます。

それでは、私たちはどうすればよいのか。龍樹大士は、ただひたすら、阿弥陀仏のお名前を称えるほかはないということ、阿弥陀仏から贈り届けられている「南無阿弥陀仏」という号を虚心に受け取らせてもらうほかならぬということ、私たちがそのように受け取るべき者としてここに生きているわけです。「南無阿弥陀仏」が素直に私たちの口から発せられること、そのことが、何とか助けたいと願われる如来の大悲のご恩に報謝することになるのだから、是非ともそのように感謝の思いを保ちながら念仏しなさいと、龍樹大士はすすめて下さっているのです。

「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」